めまいが治った！

曾文惠
（李登輝・台湾前総統夫人）

「地位　名誉　黄金も玉も　何せんや　健康に勝る　幸福はなし」

昭和十七年のこと。台北第三高等女学校の卒業式で小野正雄校長先生が私たちにたむけてくださった言葉です。そのときは「何おっしゃってるのかしら」と思ったものですが、台湾の数えで八十歳になる今、改めてそのお言葉を思い出しては、健康の幸福を感じています。

台三高女へは毎日、行きも帰りも一時間近く歩いて通っていましたし、そのころから健康には少し自信もありました。ところが去年の初め頃から、かがんだときに立ちくらみするようになりました。最初は少し休んでいればおさまりましたが、暮れの十二月十日に外出した帰り、急に目の回りがグルグルして歩けないほどの「めまい」がして、とても驚いたのです。

十六日には大きな病院に入院して、耳鼻科や眼科やMRI（核磁気共鳴診断装置）での検査もしましたが、どれも異常なし。狐につままれたような気分でした。主人たちとの久しぶりの日本への旅行を控えていたころです。いつまた、あの「めまい」が起きるのではないか、そう思うだけで不安な気持ちもわき起こってきました。二十日に退院して、たまたま「文藝春秋」一月号のページをめくっていたとき、しちのへ内科医院の七戸満雄院長先生のお書きになった『めまいは治せる！』（文藝春秋刊）という本の存在を知ったことが、いまになってみると不思議なほど幸運なことでした。

二十七日に名古屋に到着してすぐ、書店でその本を求めました。ところが読み進む間もなく大晦日の三十一日、琵琶湖畔の宿であの「めまい」が急に襲ってきたのです。抗めまい剤を飲んで、少し気分がよくなったのですが、翌元旦の夜、京都の「吉兆」でのお食事を前に、また「めまい」。本当に後ろ髪を引かれる思いで、ホテルに戻って休みました。二日の朝は楽しみにしていた清水寺と司馬遼太郎先生のお墓参りにもいけず、とても残念でした。

台湾に戻って本をゆっくり読みました。主人が私の「めまい」のことで、「台湾の医者は信じないと言うが、七戸先生の書かれたように、ヘルペスウイルスが原因と考えて間違いないだろう」というのです。私はそれでも半信半疑でした。台湾でこの治療例はなかったからです。

七戸先生の本では二千五百人を超える患者さんの臨床例から八四%に効果があったとはいうものの、かかりつけの病院の医師の見方は厳しく、抗ウイルス剤は五日以上服用すると副作用の恐れがあるといわれました。でも主人は医師たちと何度も話し、「あらゆる検査で異常なしと判断された以上、七戸先生の指摘する状況以外は考えられない」と押しきりました。

台湾では初めての治療法でした。一月二十二日から、抗ウイルス剤「Zoviraxx（ゾビラックス）」を一日五回、記録をつけながら服用しました。正直なところ、実験台にされたら、私、心配よ、と主人にも言いましたが、悩んだとき、いつもするように聖書を開きました。たまたま開いたページはイザヤ書三十章十五節。「静かにしているなら救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」。私はそれを読んで心がやすらぎ、薬をもつかむ思いで、お薬を信じることにしました。二月五日。二週間ほどで自分でもびっくりするくらい、「めまい」の不安が去りました。身の回りのことがちゃんとできるようになり、自由に動けるようになったのです。

台湾でも「めまい」に悩んでいるたくさんの方がいるはずです。主人はウイルスと「めまい」について、「病理学的研究による裏づけが必要だ」といい、かかりつけの栄民総合病院の副院長先生をリーダーとするプロジェクトチームを作ってしまいました。六月二十六日に行われる台湾医学会の大会には七戸先生をお招きして、ご講演もしていただくことにしました。台北で七戸先生と奥様にお目にかかってお話を聞くことを、主人も私も今から楽しみにしています。

これまで主人に感謝らしいことは言ったことはありませんでしたが、「めまい」は本当に主人が直してくれたのだと思い、初めて心から主人に、「ありがとう李登輝」といいました。苦しくて苦しくてしかたなかったとき、夜中にお手洗いに立ちたくても動けない私を、救ってくれたのは、私が「特別看護婦さん」と呼んだ主人だったことは間違いありませんから。

2005.5月
文藝春秋

二〇〇五年五月號的日本文藝春秋，刊登了曾文惠撰寫的文章，記載她頭昏得到醫治的過程。文中提到她讀了聖經以賽亞書「得救在乎歸回安息，得力在乎平靜安穩」的經文後，決定坦然接受醫治。